

正月二十日 往岐亭 郡人潘古郭三人 送余於女王城東禪莊院

元豐四年四十六歲（一〇八一年一月二十日）

正月二十日、岐亭きていに往く 郡人ぐんじん潘古郭の三人、余を女王城東禪莊院に送る

十日春寒不出門 十日春寒しゅんかん 門を出でず

不知江柳已搖村 知らず 江柳すで 已に村に揺くをうじ

稍聞泱泱流冰谷 稍やようや 聞まかく 泱ひようこく 流 冰谷に流るるを

盡放青青沒燒痕 尽ごとごと 放まかす 青々 燒痕しょうこんを没するに

數畝荒園留我住 數畝すうほの荒園 我とどを留めて住せしめじゅう

半瓶濁酒待君溫 半瓶はんぺいの濁酒 君あたを待って温む

去年今日關山路 去年 今日 関山かんざんの路みち

細雨梅花正斷魂 細雨 梅花 正だんこんに断魂

【語釈】岐亭：黄州の北65 km。旧知の陳慥を訪ねる。宋のとき黄州に齊安郡が置かれた。郡人：黄州およびその近県の人。女王城：黄州から十里にある永安城の俗称。稍聞：稍、かなりな程度。泱泱：水が流れる音の形容。盡放：放は教に同じ。盡教とは不管（かまわない）ということ。まかす、ままにする。荒園：隠者の田園。関山：河南省光州から湖北省麻城県に入る山越えのいくつかの関所をいうのであろう。

【通釈】春まだきの寒さに、十日ほど家に閉じこもっていたら、知らぬまに、もう新芽を吹いた柳の枝が、よく先々の村々で川の水面に垂れて揺れているのだった。凍っていた谷をさらさら流れる雪解けの水の音は、なかなか盛んであり、野を焼いた跡の黒い斑点をすっかり埋めつくすまでに青々と萌え出た春草の勢いもたくましい。（陳くんの家に着くと）荒れはててはいても。数畝の菜園があるといって、私の逗留をおすすめ、かめの半ばになっていたどぶろくが、早速に同伴の人々を歓待して温められる。思えば、去年の今日は（黄州への旅路で）ちょうど関山を通った日。あの日、霧雨に湿った嶺の梅花を見て、まさに魂も消え入る思いをしたことだった。

蘇東坡 近藤光男より抄出